

## シンポジウム第三部「死者と生者の現在」

---

コメント

### 所感と質問

菅野 覚明

お三方の、それぞれに興味深いお話を聞かせていただき、大変勉強になりました。事前の相談にしたがいまして、私はおもに渡辺裕先生のご発表についてコメントさせていただきます。他のお二方の先生には、一言ずつということにしたいと思います。

先生は非常に大きな枠組み、大きな見取り図をもって話されました。大変興味深いものでございましたが、話が大きいだけに、また大きな疑問が出て来ることになりました。いくつかおうかがいいたします。

まず、葬送の音楽が公共空間へ現れてきたということを主題として扱っておられますが、それはただちに、死が公共空間へ露出して来たことに重なるものではないだろう、と思われます。一概に死と申しましても、わかったような、わからないようなことになるわけですが、葬送音楽が公共空間へ出て来たということは、結局、死の何が、あるいはどういう側面が出て來たことなのか。あるいは、死というものがどういうものとして出て來ることになるのか、ということが問題だらうと思います。逆に、死というものがそもそもハッキリとつかみがたいものですから、逆に音楽が出て來ることによって、死のある部分が見えなくなる、あるいは死のかたちが変わったり、変質して違うものとなって出て来る、ということもあるのではないかでしょうか。出て來た側面と同時に、出て來ることによって逆に隠されるという側面も、考えられるのではないでしようか。

---

---

二つめ、これはお教えいただきたいのですが、もともとレクイエムというのは儀礼の一部分、典礼の一部分であるとかがいましたが、典礼の中で、レクイエムはもともとどういう役割を担っていたのか。死に対してどういう関わりを持つ部分だったのか。これは非常に大きな話で、死と音楽との関係、という根本的な問題になってしまいますが、もう少し微視的に、儀礼の中にいて、音楽の部分というのは、死に対してどういう関わり役割を持つものであったのか。その点お教えいただきたいと思います。

三つめです。儀礼の一部だったレクイエムが、ホールで演じられるような芸術（と簡単に申しますが）になった、という大きな流れがある、というお話をですが、もし芸術になったとすると、芸術としてあるレクイエムの、芸術性というべきものはどこにあるのか。レクイエムの中のどういう動き・性質によって、それは芸術になり得たか。これは美学方面の難しい問題になるかとも思いますが、疑問です。そしてさらに、そのことと死とがどういう関係になっているのか。これがもう一つ別の問題であろう、という気がいたします。

というのも、宗教から自立して芸術になった、というその過渡期に、革命が入って来る。そこにはむしろ、政治と芸術、という問題が挟まって来ると思うのです。そうなると、先ほど申し上げた、死が露出して来るという問題についても、まずは芸術以前に、政治と死、という問題が入りこんでまいります。非常に単純には、政治的に利用される、戦死者を英雄としてまつり利用するという種の問題です。段階としてはその先に、芸術としての自立がある。すると、宗教と芸術だったはずの問題は、政治と芸術の問題に変わって来るのではないかでしょうか。レクイエムが芸術として自立している、というならば、政治・宗教とは別のところでレクイエムそのものが持っている何かと、死との関係、これが問われなければならないと思います。もしかしたら、直接的な死の議論よりも、革命論というようなものの方が、本当の意味で渡辺先生の主題だったのではないか、という気もいたします。

---

四つめ。儀礼（政治的儀礼か宗教的儀礼かはおいて）の一部が独立して、観客に見られる芸術になる、ということが、近代特有の性質、ないしは近代というものある性質を非常によくあらわす出来事である、という捉え方になっていたと思いますが、その場合の「近代」というのは、どういう意味の「近代」であるか。「近代」と言っても、いろいろなメルクマールがあると思います。儀礼が独立して芸術になる、ということの「近代」性は、一般的な「近代」の定義からいうと、どういう事柄に一致するのでしょうか。見るとか観客とかいう事柄、第三者として見るとか観察するとかいう意味においての「近代」であろうか、とも考えました。しかしながら、儀礼が見世物化するというのは必ずしも近代の事柄ではありません。たとえば観音様の境内でご開帳をする。これは儀礼とは何も関係なく、ただご開帳それ自体を見世物しております。マツリが、マツリと切り離されて見世物化する、というだけでは、それが近代固有である、ということの根拠にならないのではないでしょうか。とすれば、（やはりここにも政治・革命が関わってくるのかもしれません）レクイエムがホールで演奏される、そのような事態の持つ「近代」性とは何なのか。ぜひうかがいたいと思います。

渡辺哲夫先生のご発表、大変に興味深くうかがいました。深刻な事例をめぐるお話を、茶化してしまうようなことになっては不本意なのですが、事例で挙げられていた一郎さんという方は、ある意味で、近代の理想を達成してしまった人だ、ということになりますね。完全な個別化、一切のしがらみのない個別化。自分に根拠を持ち、自分の中から歴史をつくる。そうした理想を実現してしまった人だ、と捉えることが出来ると思うのです。少なくとも、欺瞞的に「我々」などと言ひながら個別化をするよりは、はるかに単純明快に、事柄を成し遂げてしまっている。私自身は、自己や自我、個人というような個別化を目指す立場に立っておりませんので横から言うわけですが、こうした理想を達成してしまった人と捉えられている、と思われました。ただ逆に、もし当の立場をとらないとするならばそれは柳田國男的な共同性か、

---

---

というと、それも必ずしも当たらないと思います。以上は質問ではなく、感想です。

それからもう一つ、ご発表の趣旨とは別に、これは「病気」ということなのか、という疑問を持ちました。というのは、どうしてそうなってしまったのか、ということに関心を持ちましたので。先生は、すでにそうなった事実を説明し、記述する立場にとどまっておられますが、もしそうなってしまった原因があるとすれば、たとえば逆に「治る」ということもあり得るでしょう。医学には無知なので申し訳ありませんが、「病気になる」／「治る」ということがあるとすると、「治る」とはこの場合どういうことなのでしょうか。おそらく「治療」ということを施されていると思いますが、その先にある「治る」ということは、どういう事態なのか。お教えいただきたいと思います。

フォード先生のお話に対しては、一つだけ質問させていただきます。「大量死」という言い方をされておりますが、この時の「大量」というのは、誰から見た「大量」なのでしょうか。「大量」だと捉えている視点は何でしょうか。私が死というものを考える場合、「この自分が死ぬ」という以外のことを考えにくい。そうでないことを考えても、あまり意味がないと思っております。そういう立場から申しますと、「この私が死んで行く」ということと「大量」ということの間には、果たしてつながりがあるのでしょうか。たとえばヒロシマの中で死んだ人も、一人一人の「この私」が死んで行ったのだ、と私は思います。それが「大量」であるということが、一人一人の「この私」が死ぬということに、果たして何かをもたらすのか、何か意味を持つのでしょうか。あるいはそれは、「この私」の死を何か変えるのでしょうか。むしろ私が思うに、ここで「大量」と言う場合には「大量死」ではなく、「大量殺人」なのではないでしょうか。「大量」という言葉が、自動詞の「死ぬ」という言葉につながる意味が私にはよくわかりません。予想ではあります、おそらく私自身が死ぬ時は、たとえ大勢と一緒に地震等で死んだとし

ても、「大量死」として自分の死を受け止めることは出来ないだろう、という気がいたします。もしそこにつながりがつくとすれば、どういうことになるのか、うかがいたいと思います。

甚だ要領を得ませんが、以上のようなことを考えさせていただきました。

(かんの・かくみょう 東京大学大学院人文社会系研究科助教授)